

資料 山之口獏：「列島」への投稿作品

松下，博文
筑紫女学園短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/10383>

出版情報：文献探究. 29, pp.79-86, 1992-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



資料 山之口獏

「列島」への投稿作品

松下 博文

I 借金操業

帝國主義的植民地戦争への抵抗と、そうした状況を破壊する為の新しい理論武装の確立——これが「列島」創刊の主たる目的である（註1）。関根弘・井手則夫・出海溪也・木島始・許南麒・野間宏・長谷川龍生等を擁して「列島」が創刊されたのは朝鮮戦争勃発後の昭和二十七年三月のことである。知られるように「列島」は、戦後の新しい詩人世代の登場を告げた「荒地」とともに、戦後詩の中でも一際あざやかな閃光を發した詩誌のひとつであり、所謂左翼系作家を一堂に会した同人誌である。

山之口獏は同誌昭和二十七年九月発行の第三号に「影」と題する作品を投稿していた。如何なる理由によって「列島」に投稿するようになったのか、それについての自身の発言は一切なくその投稿経緯も今のところ不明である。しかし、同誌上に作品が投稿されたという事実は紛れもない事実であろう。作品は死後編集された遺稿集「鯖に鰯」に既に収録されている一篇で、今回初見のそれではない。しかしながら、投稿本文と遺稿収録本文との間には多少の本文異同が認められ獏の推敲意図を見る上で極めて貴重な資料と言えるであろう。作品の内容は借金取りの〈影〉に狙われる話であって、〈影〉の実体が最後に呈示されるというストーリー性は「詩法としてのた

ねあかし」と言ってもよく、獏が屢々使用する創作方法である。よく知られるように山之口獏は多くの知人に借金を申し込んでいた。

父の知人達の中で、父から借金を申し込まれなかった人が、いるであろうか。たった一度だけにせよ、生憎父の要望に応えられなかったにせよ、殆どの人が父からの借金申し込みに出会ったことがあるに違いない。もし、ないという人がいたら、その人は余りに良い人過ぎて気の毒になるような性格の人か、あるいは父に無類のけちん坊主と思われていたか、父に輪をかけた貧乏人と見做されていたかである。私の知る限り、父は、ありとあらゆる友人にお金を借りていたようだ。それも、多額のお金をぼんぼんと借りるのではなく、本当に当座の生活に必要なだけの小さいお金をつましくつましく借りるのである。○月○日、一〇〇〇円、Kさんから。△月△日、三〇〇〇円、Oさんから。と、いうように、母が毎日つけていた家計簿には、個人の名前が、しばしば登場していた。頻繁に個人名が出て来る月は、当然のことながら、母の御機嫌は、非常に悪い。御機嫌斜めどころか、逆立ちである。（略）母は、借金というものが大嫌いなので、それが自分達一家をしのがせてくれるものとわかっていてさえ、不愉快で不愉快でたまらなかつたのである。原稿料がはいると、真先に母がすることは、借金の整理

である。前の頁を繰って、KさんやOさんの名前の横に⑧と印をつける時の母の表情ほど安堵に満ちたものを私は見たことがなかった。(略)父のことというと、愚図でのろまで変りもんの甲斐なしみたいという母が、「あれだけは偉かった」という父の一面がある。借金は、自分がする、というところだという。決して、母に、実家へ行って都合して来いとか、質屋へ行って

来いとか、言わなかったそうで、それだけは有難かったと、母はしみじみ感謝するのである。父としては、一家の主人としての誇りを、そこでささえていたわけであろう。そのかわり、一人で背負った責任は、あくまで、非常な重さを父の肩にかけ続け、父の命を縮めてしまったのかもしれないとも思えるのだが。

〈小さいお金をつましくつましく借りる〉父親の姿、原稿料が入るや否やつましくつましく借りる)母親の姿、家計簿に⑧と印をつける時の安堵に満ちた母の表情を見ている娘の姿——、「借金操業」と題する山之口泉の文章である(註2)。そうした経緯は、たとえば、「十二月のある夜」「芭蕉布」「自問自答」「口のある詩」「鹿と借金」「告別式」「彼我」「借り貸し」「ぼすとんばっぐ」「深夜」「借金を背負って」等の「鯖に鯖」に収録された詩篇群を通読すれば一層明瞭になろうし、「貧乏を売る」「友情と借金」「マイナス五千元——最後の質種は女房が工面する」「質札」等のエッセイに目を通すならその実態はより一層明らかになるであろう。へぼくの家は、へぼくと女房と娘との三人暮らしなのだが、月々の生活費を最低に見積って二千元としてみても、年に二万三千円也の収入では、その月々の生活費にも足りないわけなのだ。しかし、事実は、月々の平均にして、五千元から七千元ぐらいの生活を

利用して生きているのである。だが、その平均額から、二千元をマイナスした大きな部分はことごとく借金なのであることも、また、事実なのだ。その上、現状によると、もう借金に行くところもなくなった。新たに開拓してなんとか借金したいとおもわぬことでもないが、泥棒か、それに類するみたいなことでもない限りは新たな開拓も不可能という状態に佇んでいるのである(「マイナス五千元——最後の質種は女房が工面する」)。

ぼすとんばっぐ

ぼすとんばっぐを

ぶらさげているので

ミミコはふしぎな顔をしていたが

いつものように

手を振った

いってらっしゃい

と手を振った

ぼくもまたいつものように

いってまいりませうとふりかえったが

まもなく X の

門をくぐったのだ

X にはどのような言葉を入れたらいいだろうか。前項の如き家庭の事情を知らない人なら、〈家〉〈わが家〉、あるいはそれらと等価な言葉を入れるに違いない。表題の持つイメージからは勿論

誰の目にも「旅行カバン」がそれと映るであろうし、「家」という単語が多分脳裡をよぎる最初の言葉ではなからうか。しかしながら実際は「質屋」である。ここにおいてわれわれは挿入される言葉の意表性に一瞬啞然とすることだろう。つまり、「ぼすとんばっぐ」という表題には読者の予想を見事に裏切る表現上のトリックが内蔵されていたのであって、そうした意味では、手にさげたへぼすとんばっぐ（これはおそらくヨレヨレのそれである。パリッとした革製のものであればカタカナ表記になる筈だ）には「質種」ならぬ「トリック装置」が詰め込まれていた、と見れないこともない。言葉を換えて言うなら瞬時に読者の意表を突く「不意撃ちの装置」が内蔵されていたと言ってもいいし、先に使用した言葉で言えば「詩法としてのたねあかし」装置が嵌め込まれていたと言ってもいいであろう。そうした貌の創作方法に早くから注目していた詩人がいた。「日本のほんとうの詩は山之口君のやうな人達からはじまる」と題する次の文章を読みたい。

（貌君の詩のおもしろさは、（敢て、逆説といはず）考へかたのおもしろさだ。貌君は、路をまっすぐに歩かない。変な鍵をはづして、まるでちがつた道へでる。それは、かれの策だ。彼の危機は、この術が、常套になつてひとにおぼえられることだが、幸ひ、かれは、ユニックな詩質をもつてゐる。そこで、かれは、この危機を脱する。真理といふ奴が、防腐剤を一つかみ投げ込んだからである）。

第一詩集『思弁の苑』に寄せられた金子光晴の序文だが詩人の発想のおもしろさ・考え方のユニークさを鋭く指摘する金子光晴の目は、やはりすぐれた作家のそれと言ってよい。すなわち、「影」にも等質のユニークさ（変な鍵）は内蔵されているのであり、勿論、

こうした側面を十分考慮に入れてこの作品は鑑賞される必要があるようにわたしには思われる。

II 国民詩とサークル詩（国民文学論）

「列島」が創刊された昭和二十年代後半は中国革命、朝鮮戦争、サンフランシスコ講和条約の締結等を巡って民族のアイデンティティが強く自覚された時期であった。知られるように竹内好「近代主義と民族の問題」、丸山静「民族文学への道」、河盛好蔵「国民文学の興隆」、蔵原惟人「芸術における階級性と民族性」、野間宏「国民文学について」のような民族の独立と文学活動の相関関係が再び社会の注目を集めたのもこの時期である。

こうした状況の中、「影」が投稿された「列島」第三号は窪川鶴次郎・赤木健介・岡本潤・壺井繁治・野間宏を擁して「国民詩とは何か」という座談会を設定することになった。

編集部 国民戦線の結成促進といったことと関連して新しい角度で国民文学というものが問題になってきています。それは党の文化運動の新しいテーゼの中にもありますし、それとくに関連しているわけではないと思いますが、たまたま「新日本文学」の六月号に蔵原惟人が「芸術における国民性と階級性」（註3）という問題で、やはり国民文学の問題に觸れております。僕たちは、詩の問題として国民詩の問題というものはどのような問題の発端から考えるわけですが、その国民詩とはいったいどういう考え方のもとに成り立つか。過去に国民詩といったようなものがあつたかどうか。それとも国民詩と

窪川

いうものは今後のレジスタンスの運動と結びついた文学運動の中から新しく生まれてくるものか。いろいろ疑問があるわけで、そういう疑問を明らかにして一つの問題の提起をしたい。だいたいそういったようなことがらに関して今日はお話願いたいです。

一方に国民戦線というものがあつて国民文学というものが提唱されるようになってくる。そこで国民詩を考えてみたいというその筋道はわかるんだが、それじや詩の領域ではたして国民詩というものを提唱する必然性なり欲求が、実際の創作の上なり詩論の上で出てきているのかどうか。そういう必然性なり欲求の上に立つての問題提出であるのか。もしそうであるとするれば、その必然性あるいは欲求を実際の詩の理論家なり実践家伺いたい。もう一つは、国民戦線に立脚する国民文学が提唱されているとすれば、その国民戦線なり国民文学というものがどういうものか、それも伺いたい。

岡本

日本語に訳して民族と訳すのが正しいか国民と訳すのが正しいか、いろいろ説があると思うが……一千九百十年かのレーニンの文章の中に、「あらゆる国のうちには、二つの国民ないし民族がある。すべての国民文化のうちには二つの国民文化、民族文化がある」ということをいつていたと思うが、あれは僕が国民詩、民族詩を考える場合に、一つの基礎になっているのです。太平洋戦争中には、しきりに民族の高揚、国民意識の高揚がいわれ、国民詩ということもいわれていたが、それはあきらかにレーニンがいつている二つの国民文化の中の支配階級を代表する国民文化にふくまれるものだと思う

野間

う。それから、自然発生的に支配階級的意識をもたずに出てきたものでも、ことごとく軍国主義的・支配階級的国民詩に変えられていつている。いま僕らが取上げようとする国民詩というものは、そういう支配階級的なものに對立する人民大衆の詩だな。それが現在の國際的・国内的な情勢の中で民族独立というモメントが強く出てきているわけだから、レーニンのいつたように人民大衆を基礎にしたものとして、国民詩なり民族詩がいま起こりつつあるし、それをわれわれはつきり方向づけてゆく必要がある。基礎的なものとしてはこんなふうを考えているのですが……。

結局、日本が占領されて日本というものが失くなっている。そういう現実から日本を取返そうという動きが、国民全体にずうつと拡がつてゆく。そういうところから国民とか——国民という言葉を使つてしまつて説明不十分だれど——民族というものが出てきていると思うんです。そういう点から考えて、これからの実際の日本がどうなつてゆくかといえは、日本を奪つてゆこうとするものと奪い返そうとするもの、それが日本全体に拡がつて、国民的な、民族的な規模で民族解放斗争が拡がつてゆく。その解放斗争の斗いを抜きにしては、いくら国民ということを考え民族ということを考えても——つまり国民文学というのは、普通はブルジョアジーが封建制を倒して資本主義制度というか市民社会を打ちたてて行つたところに出てきたドイツケンズ、バルザック、スタンダールなどのような文学を指しているんだが、しかし僕らはそういうものを打ちたてようという目標を直接に持つのではなく、

むしろナチ占領軍をフランスのレジスタンスの統一戦線が打破してフランス民族を解放した斗い、それから、中国の民族解放の斗い、そこから生まれてきた文学がまず考えられるべきで、そういうふうな形で国民文学を考えようとするわけですね。

赤木

名称は国民詩と名づけられるか民族詩と名づけられるかは別として、そういう実体が発生してきているということ、個々の作品の中に具体的にあらわれてきているという事実は、占領制度のつづいていっている日本の現実の反映です。この点は、いまの野間さんのことばで尽きていると思うんです。つぎにさきほど岡本さんが、一つの国民の中にも一つの国民文化・民族文化があるということをおっしゃったが、それはたしかにいまもそうです。しかし日本の歴史的現実の中では、一方の、かつて侵略戦争に導いた国民文化の流れは、今日では売国的なものになつていっている。彼らがふたたび国民文化というとき、それは米帝に日本を売りわたすための武器です。ところが、あの時期に押えつけられて声を発することもできなかったものが、今日なお大きな圧迫はあるが、同時にめざましいたかいははじめていっている。それだから、国民という言葉に、いま新しい意味が加わってきたといえるのです。そして、さかのぼっていくと、日本の歴史の中にずつとつらなっている圧迫されてきたもの、たたかつてきたものの伝統が、今日外国外国の支配という新しい条件の中で爆発しはじめたというふうにもみられる。そういう意味では、正しい意味での国民文化についてわれわれは歴史的なつながり、過去の伝統というものも考える

必要があると思います。しかし一番大事なことは、いままで詩を作ったことのない人々の間からも、詩を作ろうという気持ち、詩を通じて自分の苦しみをうたい、そして自分たちをおさえている権力を打倒しようという気持がうまれてきているということですね。ここに、国民詩の新しい意味がありますね。

編集部

やはり階級的な基盤が違ふということですか。

赤木

階級的な基盤も、戦争前と今日ではひろがりやが違ふと思いませんか。というのは、戦前ですと、軍閥やファシズムにおさえつけられたのはもちろん、人口の大部分なだけで、労働者・農民がとくに苦しめられていた。そこから尖锐なプロレタリア文学の形態をとつた。だが戦後、とくにここ一、二年の日本国内情勢の変化は、労働者・農民はその中心勢力だが、商人・学生、それから民族資本家もといった具合に、たたかう階層の中がひろがつているんです。当然今日の国民詩と名づけられるような詩の運動は、非常に広い基盤を持つことになると推論できると思います。ただ、その場合に民族資本家もふくめるというのであつて、その比重が重きをなすのではない。やはり労働者農民が主体です。

「国民詩発想の必然性」と題した座談会冒頭の文章である。以下、(1)国民が妥当か民族が妥当か、(2)文学に於ける民族の傳統、(3)利用主義について、(4)国民文学の二つの危険、(5)愛国者という言葉、(6)モノローグの克服、(7)子供の詩と黒人の詩、(8)錦の御旗式では困る、の順に話は展開するがここで留意すべきは、(1)に示された如く〈国民〉〈民族〉なる使用用語の概念規定が極めて曖昧なまま議事が進行していることであろう。しかしこの曖昧さこそが、実は国民文学

論争の問題の多様性と複雑さとを明快に語っていると断じてよいように思われる。たとえば、先に示したように、「国民詩」の定義について岡本潤は「支配階級的なものに對立する人民大衆の詩」と言い、同じく「国民文学」について野間宏は「民族解放の闘い」と定義付けた。が、しかしながら当時としては、「国民」(民族)なる論争用語の使用については野間や岡本は勿論のこと山本健吉が以下に述べるように「躊躇の感情」なしにはこうした用語を使用することは出来なかったのである。

〈国民文学についての論議が大分盛んになってきたが、私はそれを系統立って読んでいくわけではない。だが私自身、これまで書いた時々の文章に、断片的にはあるが国民文学という言葉を用いてきたことは事実だ。それはこのような呼び方で、漠然と頭の中にある新しい文学へのイメージや願望を托そうとする気持ちがあったからである。だがその場合、私にある躊躇の感情が起るのをどうしようもなかった。それは私自身「国民」という言葉を好きでないこと、いわんやそれと並んで用いられている「民族」という言葉を、血なまぐさい回想を伴うことなしに、虚心に口に出すことが出来ないということに起因する。「国民」といった場合、それは國家の構成要素としての人間を指していることに間違いないが、私には國家という言葉は、われわれをおびやかす痛めつけるものとしての軍隊や官僚の機構の連想なしに、思い浮べることは出来ないのである〉。

昭和二十七年八月号「理論」に掲載された「国土・國語・国民」国民文学についての覚書——という文章である。(血なまぐさい回想を伴うことなしに、虚心に口に出すことが出来ない)と公言する忌まわしい言葉——、当時の知識人がこうした用語に如何に敏感な

反応を示しつつその論争の真っ只中に身を投じていたかがよくわかる文章であろう。こうした状況の中、関根弘をそのリーダー格とする「列島」は様々な試みを企図して行った。中でも注目すべきはサークル詩運動の推進だった。

「列島」第四号は「サークル詩の現状分析と批判」と題して関根弘「サークルに対する詩人の責任」、大久保忠利「サークル詩の言語と表現」、鶴見俊輔「サークル詩の哲学」、安東次男「サークル詩の技術的評価」という評論を一挙掲載し、花岡次郎・関根弘・大久保忠利・安東次男・岡亮太郎・古川宏・ひやまえたろう等を一堂に集めて討論会「サークル詩の明日への展望」を企画した。そしてさらに第八号では「サークル詩の運動と理論」と題した特集を目論見、関根弘「サークル詩運動論」、福田律郎「安静度表の中から」、赤木健介「サークル詩の傾向」、岡本潤「『サークル詩』という枠」、遠地輝武「ひとつのセクト主義」の如き(サークル)の在り方に対する五人の批評文を紹介した。こうした動向からも知られるように、詩誌「列島」は所謂社会派詩人の一大拠点を成していたと評してもいいだろうが、要するにそれは「支配階級的なものに對立する人民大衆の詩」という国民文学論争の前衛に自身の存在を曝していたということの意味するものでもあろう。つまり山之口猷もそうした中に身を置いていたということである。

ただ誤解を招かないように言うなら、ここにどった詩人たちは論争の前衛たるに止どまらず芸術の前衛も無論自認していたのである。関根は言うに及ばず多くのすぐれた実験的詩法を模索しながらすぐれた実作を数多く産み出していることは知られる通りである。思うに三号に掲載された「影」にもそうした方法的側面は明らかに

見られるのであり、こうした角度からこの作品を再考するなら一層興味深い問題がここに提供される筈である。

III おわりに

「列島」は昭和二十七年三月から三十年三月まで全十二冊発行された。創刊号に名を運ねた編集委員は安部公房・出海溪也・井手則夫・木島始・木原啓允・許南麒・近藤剛規・椎名麟三・関根弘・野間宏・福田律郎・村松武司・山本茂実、その他地方委員として伊城暁・伊藤正斎・生石保・長谷川龍生・浜田知章・御庄博実・湯口三郎・吉田美千雄・吉本千鶴が参加した。その成立事情や廃刊事情及びサークル詩活動については昭和五十五年七月刊行の「詩と思想」（土曜美術社）の特集、「『列島』と詩運動の未来」を参照されたいが、「列島」を性格づけているのはやはり「詩誌『列島』發刊について」という野間宏の創刊の辞であろう。

「詩が日本の全土を蔽おうとする時代が来ている。現在日本のどのようなところへ行つても、詩の雑誌、詩のリーフレット、詩集、詩のビラの廻されていないところはない」という書き出しに始まり、「僕たちはこれまでの古い詩人が後生大事にしてきた古い秩序を大胆に打ち破ることを宣言する（略）是非ともできるだけ広はんに多くの人が参加されて、日本の新しい詩の創造が可能となることを期待する」と結ばれるこの文章には民衆の詩心をかなり強烈にアジテートしようとする熱気が感じられる。「列島」はまさにそうした熱気とともに戦後の一時期を足早に駆け抜けて行った詩誌であった。山之口貌もそうした熱気の中にままならぬ身を沈めていたのだった。

註

(1) 野間宏の創刊の辞や創刊号「編集後記」の関根弘の次のような文章はそうした一面を語るものであろう。〈涙が顔を洗い、美しく諦めてしまふところの古さと無縁でありえない僕らが、ルネ・クレールの「悪魔の美しさ」に魅せられるのは、しかしいかなる矛盾でもない。涙の河をいいかえれば、僕らの古さ、社会の古さを笑いの原子爆弾で叩きつぶす仕事、前衛の課題である。「列島」の課題である〉。

(2) 山之口泉「借金操業」（『父・山之口貌』昭和六十年八月・思潮社刊）所収。

(3) 「芸術における国民性と階級性」というタイトルは誤りである。正確には「芸術における階級性と民族性」。

（一九九二年三月十日稿）
—— 筑紫女学園短期大学講師 ——

影

山^{やま}之の口^{ぐち} 獺^{ばく}

泡盛屋に来て
泡盛を前にしているところを
うしろからぼんと
肩をたたくかれた
ふりむいてみるとまたかれなのだが
駅前のひろばで
ぼんとたたくいたのもかれ
満員電車の吊皮の下で
ぼんとたたくいたのもかれで
乗つたり歩いたり飲んだりも
うっかりは出来なくなつてしまつたのだ
かれはいつでもぼくのことを
うしろからばかり狙つてくるみたい
ぼんと肩をたたくいては
ひとなつっこそな眼までしてみせて
このあいだのあの金
いつ返すんだいとくるのだ。